

イチゴ炭疽病

1 病原菌の特徴

- (1)イチゴ炭疽病は、主に *Colletotrichum acutatum*(コレトリカム・アキュータム)と *Glomerella cingulata*(グロメラ・シングラータ)という2種類の糸状菌(カビ)によって起こります。両者では感染による葉の病徴が大きく異なります。
- (2)*C. acutatum*の場合、葉縁から不整形の大型病斑を生じますが、*G. cingulata*の場合は直径2~3mmの淡墨色~黒色のほくろ状病斑となるため、判別が可能です。
- (3)その他の特徴として、*C. acutatum*は主に親株床や仮植床で発生し、葉・葉柄・ランナーに病斑が現れ、最後に葉枯れ症状を示すので葉枯炭疽病とも言われます。まれに株が萎ちようする場合がありますが、減収などの大きな被害に至ることはあまりありません。
- (4)一方、*G. cingulata*が感染した場合は株が萎ちようすることが多く、ひどい場合は枯死に至るため、育苗期では苗不足を招くほか、潜在感染した苗を本ばに定植すると減収することがあります。このため、本稿では *G. cingulata*について説明します。



写真1 *G. cingulata*のほくろ状病斑

2 被害の様子

- (1)葉・葉柄・ランナーなど局部的に病斑を形成する場合と、株が萎ちよう・枯死する全身的な症状があります。
- (2)ランナーや葉柄の病斑は黒色の長径3~7mmの少し陥没した紡錘形又は楕円形で、多湿条件では病斑上にサーモンピンクの胞子塊を形成します。他の斑点性病害でも同様の病斑を形成するものがありますが、このサーモンピンクの胞子塊は生じません(簡易診断の指標となります)。
- (3)クラウン部が侵されると、下葉が萎れて株全体が枯死します。潜在感染株では病斑が全く見えずに萎ちよう・枯死することがあり、根腐れや湿害などによる萎ちようと同じように見分けにくいですが、炭疽病はクラウン部の褐変が根の傷みより先行します。



写真2 葉柄の病斑



写真3 クラウン部が侵され萎ちようした苗

(4)参考 “ビニール袋を使った簡易診断”

- ①イチゴの葉を外側から3枚程度採取する。
- ②水道水で表面を良く洗う。
- ③水をよく含ませたティッシュペーパーと検定葉をビニール袋に入れ、膨らませて口を結ぶ。
- ④28℃程度で2週間程度静置する。
- ⑤サーモンピンク色の胞子の塊の有無を確認する。



写真4 検定葉に形成された胞子塊

3 発生について

- (1) 伝染源は潜在感染した親株や土中に残った前作の発病株残さによるものがあり、これらから形成された胞子が雨や灌水のしぶきなどと混じって飛散することにより伝染します。
- (2) 病原菌の発育適温は28℃前後で、6月下旬から9月下旬にかけての高温時に発生しやすくなります。
- (3) 発病のしやすさには品種間で差があり、現在の主力品種は発病しやすい品種が多くなっています。

4 防除時期と防除方法

(1) 耕種的防除

- ア 親株及び本ぼ定植苗は無病の株を使用する。
- イ 育苗中は、夕方や曇天時の長時間灌水はさけ、茎葉の濡れ時間を長くしないように努める。
- ウ 雨よけや高設育苗においても風雨による水滴のはね上がりに注意する。
- エ 灌水には水はねの少ないドリップチューブや低水圧の散水チューブを使用する。
- オ 肥培管理に注意し、過度の窒素施用を避ける。
- カ 発病株や罹病残渣は見つけ次第除去し、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密閉してから処分する。

(2) 薬剤防除

- ア 風雨により発病が助長されるので、降雨後は重点的に防除を行う。
- イ 耐性菌発現のおそれがあるので、同じ系統の薬剤を連用しない。
- ウ 気温が20℃を超える時期になると胞子の飛散が始まるので、この気温を目安に予防散布を開始する。
- エ 前年に炭疽病が発生した本ぼや親株床などでは、土壤消毒を行う。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

- 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会
- 問合せ先(原稿執筆)
埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409
埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県